

「約束の聖霊」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 16：7～14

<導 入>

今日は、ペンテコステ記念日です。それで、聖霊が人類の歴史上最初にこの地上に下られた時の状況を、聖書の言葉から見てみましょう。使徒の働き2章1節から21節です。こうして聖霊は地上に下られ、今も私たちのうちに働いておられます。このことは、イエスが十字架にかかれる前に約束しておられました。イエスが、聖霊について何を約束しておられたのかを、ヨハネ福音書16章の言葉から探っていきましょう。今日の説教のタイトルは「約束の聖霊」です。

I. 聖霊の派遣

▽初めに、イエスが弟子たちに聖霊の約束を与えられた状況を見ましょう。

ヨハネ16：6「わたしがこれらのことを話したため」とイエスは言われました。「これらのこと」とは、イエスがこの地上から去られて、弟子たちと別れなければならないことです。イエスは、ご自分が十字架にかかって死に、この地上から去られることを話されました。しかし、弟子たちはそのことを理解できませんでした。ただイエスと別れなくてはならないことはわかっていたので、「心は悲しみでいっぱいになっていました。別れることは悲しいことです。この地上に生きている人の数だけ、別れの悲しみがあります。どのようにして別れるのかはわかりませんが、別れは必ず訪れます。ある牧師先生が Facebook で次のようなことを書いておられました。“その先生が治療に通っておられる歯科医師の方が「元気で、長生き、ぽっくりと」と言われていました。その先生がそのことを奥様に言われたところ、奥様は「私はあなたのメッセージを聴いている時に、天に帰ることが希望です」と言われました。ハレルヤ。私は思っています。ふたりで祈っている時に、天に帰れたら”とその記事は結ばれていました。ふたりで召されれば、別れの悲しさを味わうことはないかもしれませんが、そのようなことは事故や自然災害以外ほとんどないでしょう。弟子たちは、イエスと別れなくてはならないと自分たちのことしか考えていませんでした。悲しみにくっていた弟子たちに、イエスは愛をもって聖霊の約束をされ、彼らを励まされました。

ヨハネ16：7 イエスは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです」と、思いもよらないことを語られました。イエスがこの地上を去られるのを悲しんでいた弟子たちにとって、それが「益」になるとは理解できないことでした。そして、イエスは「助け主」聖霊がこの地上に来られることを約束されました。聖霊が来られることが、どうして「益」になるのでしょうか。イエスが肉の姿でおられた時は、人はどこでもイエスと一緒にいることはできませんでした。会えば、また別れなければなりません。イエスは時間や空間の制約を受けておられました。しかし聖霊には、そのような制約はありません。どこに行こうとも、聖霊は私たちとともにおられます。聖霊は私たちの内に住まわれ、私たちと親しい交わりを持たれます。この交わりは、イエスを信じる者にとって一生続きます。聖霊がこの地上に下られ、イエスを信じる者のうちに宿られることは、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ28：20)というイエスの約束の成就です。聖霊は、世界中のイエスを信じる人々のうちに働かれ、また歴史のどの時代にあってもその働きを進められてきました。そういう意味においてイエスが肉体でおられた時

以上に、聖霊が送られる方が人類にとって益なのです。イエスがこの地上から去られた後、弟子たちは迫害や苦難に直面しますが、聖霊はどんな時でも弟子たちを助け、導かれました。私たちも、弟子たちと同じ恵みを受けることができます。どのような悲しみを体験したとしても、どのような苦しみに遭おうとも、聖霊は私たちを助け、導かれます。

II. 聖霊の働き

▽それから、イエスは聖霊がどのような働きをされるのかを明らかにされました。

(1) ヨハネ 16:9 聖霊は人に罪を悟らせます。ユダヤ人はイエスを十字架につけた時、罪を犯しているとは夢々思っておりませんでした。反対に、彼らは神様に仕えていると信じていました。しかし聖霊が下られた後、ペテロによって十字架のことが語られた時、彼らは心を刺されました(使徒 2:37)。ペテロの口から十字架が語られた時、彼らはどうして罪の意識を持ったのでしょうか。それは、聖霊の働きです。聖霊は、彼らがイエスを信じていないことを明らかにされたからです。次のような話があります。インドのある村で一人の宣教師が、村人の家の壁にスライドを映して、キリストの話をしていました。十字架の場面が映し出された時でした。一人のインド人がそうせざるを得ないという様子で前に進み出て、「おりて下さい！あなたではなく、わたしがそこにかかけられなければならないからです！」と叫んだというのです。私たちは罪の意識なくして、救い主イエスを必要としていることはわかりません。人に罪の意識を芽生えさせ、イエスを救い主として信じさせるのは聖霊の働きです。聖霊の働きなくして、一人のクリスチャンも生まれません。ましてや福音が全世界に、歴史を通して伝えられることはなく、イエスを信じて、希望ある新しい人生を送る人もいません。

(2) ヨハネ 16:10 イエスは犯罪人の一人として十字架につけられ、無残な死を遂げられました。ところが、十字架の前にいた百人隊長は「この方は本当に神の子であった」と告白しました。彼にそうさせたのは、聖霊の働き以外にありません。ローマ 4:25 イエスは義と認められるために復活されました。Ⅱコリント 5:21 イエスが神様の御前で義、すなわち正しいと認められたので、私たちも神様の御前で義、罪なしと認められるのです。イエスを義、罪なしと確信させ、イエスを信じる者を義と認めさせるのは、聖霊の働きです。

(3) ヨハネ 16:11 聖霊は、さばきがあることを確信させます。私たちは神様の御前に立ち、さばきを受ける時、有罪を宣告されることはありません。この世を支配する者、つまりサタンがさばかれたからです。サタンは私たちを有罪にしようとしますが、すでにサタンはさばかれましたので、私たちが有罪になることはありません。私たちが神様に受け入れられていることを確信させるのが、聖霊の働きです。

聖霊は、イエスを信じないことは罪であること、そしてイエスを信じる者は神様に受け入れられることを確信させます。聖霊の働きなくして、これらのことが行われることはありません。私たちがイエスを信じて救われ、神様に受け入れられていることを確信させるのは、聖霊です。聖霊は、私たちの救いにとって、欠くべからざるお方です。私たちが信仰の道を歩むためには、聖霊はどうしても必要なお方です。聖霊の助け、働きなくして、信仰生活はありません。このことを、しっかりと心に受けとめておきましょう。

▽ヨハネ 16:13、14 「御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り」とあります。御霊は、まさに「神様の管」です。神様に属する真理をそのまま語られます。そこには、御霊ご自身の考えや思いはいつさい入っていません。神様の真理は、聖書に記されています。聖霊は、聖書の言葉を越えたことは語られません。私たちは、よく「聖霊の導き」と言います。しかし、その時自分の考えや願いが入っていないかどうかを十分吟味する必要があります。聖書的一部分から、これが御霊の導きであると判断するのは危険なことです。もちろん聖霊はそのような形で語られることもありますが、神様のみこころと言うには、聖

書全体から判断しなくてはなりません。聖霊は、私たちの思いにいろいろなことを語られますが、その主なものは二つあります。一つは、「これから起こること」です。私たちにとって、これから起こることは「天国の栄光」です。歴史は流れ、私たちの人生も過ぎ去っていきます。イエスを信じる者にとって、次に起こることは天国です。聖霊はこのことを明らかにされ、天国を目指して歩むように助けられます。第二は、14節「イエスの栄光」を現わされます。聖霊は人ではなく、イエスの栄光を現わされます。神学も、御霊の体験も、神様への礼拝も、イエスの栄光を現わすように、聖霊は働かれます。聖霊はただイエスを現わし、イエスに栄光を帰するために働かれます。徹頭徹尾イエス中心です。神様の奇蹟も、イエスをあがめるためです。神様が私たちによくして下さるのもイエスの栄光を現わし、イエスに従う信仰を養うためです。私たちがイエスを知れば知るほど、イエスの栄光を見ます。

Ⅲ. 悲しみが喜びに

▽イエスは、この地上での別れを悲しんでいる弟子たちに聖霊が遣わされて、聖霊が助けて下さることを明らかにされた後、悲しみの向こうにある喜びを語られました。

ヨハネ16：20～22 イエスは20節で「あなたがたの悲しみが喜びに変わります」と約束されました。弟子たちはイエスと別れなくてはならないので、悲しんでいました。しかし、その悲しみが喜びに変わるとイエスは語られました。その悲しみはいつまでも続くのではなく、その悲しみは終わり、喜びの日がくるのです。いつ来るのかは、イエスは「しばらくすると」と言われました。「しばらく」とは、いつでしょうか。イエスが十字架で死なれ、よみがえって弟子たちに現われた時とか、イエスがもう一度この地上に戻って来られる再臨の時とか解釈されています。少なくとも、弟子たちがすぐに喜びに満たされることはありませんでした。イエスの十字架という苦難を通りました。彼らはよみがえられたイエスに出会って喜びに満たされました。その後その喜びは奪われ、迫害に遭いました。しかし、イエスが再臨されて与えられる喜びは奪われません。ここで、私たちが心に留めなくてはならないことは、私たちが体験する悲しみはいつか必ず終わります。そして、喜びの 때가訪れます。イエスが与えられる喜びは、22節にありますようにイエスに会う喜びです。この喜びは奪われることはありません。詩篇17：15 これが、私たちがイエスに出会った時の感動です。「御姿に満ち足りるでしょう」。イエスの御姿に、私たちの心は喜びに満ち溢れることでしょう。この地上の生涯では、何度も悲しみに遭い、その悲しみの深さも違うでしょう。また弟子たちもそうであったように、多くの苦しみを通らなければなりません。しかし、イエスに出会う喜びは、消えてなくなることはありません。その喜びは、この地上で体験する喜び以上のものでしょう。それは、私たちの生きる望みです。

まばたきの詩人と言われた水野源三さんの詩です。「約束されしイエスよ」という題です。

「愛する者を失い 悲しむ者とともに 涙流されしイエスよ 慰め与えたまえ
信じるなら御国の 栄光を見られると 約束されしイエスよ 信仰を与えたまえ
冷たき墓の中に 葬られしラザロを 生き返されしイエスよ 希望を与えたまえ」

悲しみの中にも、天国でイエスに出会うのを求めている詩だと思えます。

イエスは、弟子たちが今後体験する悲しみと困難を覚え、彼らを励ますために聖霊の約束とイエスに再び会うという希望を語られました。私たちも、信仰生活で弟子たちと同じ体験をしますが、この希望をもって歩みましょう。

最後に、水野源三さんの詩をもう一つご紹介したいと思います

「み国へ帰りゆく者も それを涙で送る者も み前で再びまみえるその日を望み 恵み深き神をたたえよ・・・互いに祈り合いながら 残されしみわざを受け継ぎ み前で再びまみえるその日を望み 恵み深きみ神をたたえよ」